

## ペルー首都近郊山岳農村における自然・社会条件の差異と小農経営の多様性 Diversity of small farmers' management based on natural and social environments in Peruvian suburban highland area

星川 真樹<sup>1\*</sup>

Maki Hoshikawa<sup>1\*</sup>

<sup>1</sup> 東京大学大学院

<sup>1</sup> Graduate school of Arts and Sciences, the University of Tokyo

ペルーの農村地域には、富んだ自然資源がある一方、都市部に比べ、社会インフラの整備の遅れや不備、教育機会の有無、医療環境の不備などさまざまな地域格差が顕著である。また、近年、ペルーの主要輸出品目である鉱産物の輸出が好調であることから、首都リマにおける経済成長が著しく、このような社会変動の中、多くの小農世帯の若年層は村での自給的農業を捨て、都会に職を求める傾向にある。ペルーの国土は、コスタ(砂漠海岸地域)、シエラ(山岳地域)、セルバ(熱帯地域)の3つに大きく分けることができ、とくに山岳地域であるシエラでの貧困は深刻であり、シエラからの都市部への流入人口が増加傾向にある。しかし、山岳地域であっても首都近郊の山岳農村では、首都へ流入することが距離的により容易でありながら、小農経営を保持し、所得を維持・拡大している例も多くみられる。そこで本研究では、首都近郊の山岳地域農村における小農経営の変動と自然・社会条件の差異に起因する多様性を明らかにすることを目的とする。

山岳地域であるシエラでは、古代アンデス文明の中心地で、古くから集約的な定住農耕が発達し、伝統的手法で自給用や国内消費用の生産物を生産してきた(石井,1997)。しかし、山岳地域であってもその植生は標高差などによって全く異なっている。Pulgar(1941)は、山岳地域をその標高や伝統的アンデスの呼称など歴史的背景も加味しながら自然科学的に5つに分類している。それらは、500-2300mのYunga、2300-3500mのQuechua、3500-4000mのSuni、4000-4800mのPuna、4800-6768mのJanca/Cordilleraの5つの自然区分である。Quechuaよりも標高の高い地域に暮らす小農の多くは、その植生から、伝統的作物であるジャガイモやトウモロコシなどを生産したり、アルパカやリャマの牧畜をしたりして暮らしている。Yungaでは、ジャガイモやトウモロコシも生産できるが、商品価値の高い非伝統的作物とされるアボカドやルクマ、チリモヤといった青果物も生産でき、その点がQuechua以上の標高の山岳地域とは大きく異なっている。

本研究のフィールドは、首都から東に120kmほどに位置し、標高1000-3500mの間に7つの集落が点在しているSan Mateo de Otao村で、Yunga-Quechuaの自然区分にあたる山岳地域である。村の農家の多くは、農地が1ha以下の小農で、この植生を活かし商品価値の高いアボカドとチリモヤの両者を組み合わせて生産、販売している。首都近郊であることから、大きな市場へのアクセスが良いなどの立地面の優位性に加え、その農地が商品価値の高い非伝統的作物を生産できるYungaからQuechuaに位置しているという生産面での優位性をも併せ持った地域であることが、小農の経営維持の背景にあったことが示唆される。しかし、聞き取り調査から、農家間でも非伝統的作物の導入経緯や経営に差異があることが明らかになった。その差異を生じる要因としては、自然条件と社会的要因の2つに大きく分けることができた。自然条件では、耕作地の標高の差異による生態環境の違いにより、生産作物が規定されることなどが挙げられる。社会的要因としては、農家と仲買人との関係の差異などがみられた。このような差異が、一つの村の中でも農家間で経営改善の成果に差異を生じさせていた。

キーワード: ペルー, 小農経営, 山岳地域, チリモヤ, アボカド

Keywords: Peru, small farmers' management, highland area, Cherimoya, Avocado